

寝取られ男の娘



第 1 章

I really want You
I really want You
I really want You
I really want You

「じゃあ、紹介するわ。こちらがヤマヒロさん」

「え？　なんで…」

「なんで？」

弥彦は困惑して上手く言葉に出来なかったが、「なんで…、僕と火野●イさんの寝室に、知らない人が座っているの？」と、そう聞きたかった。

実際多分そういう意味なのだろうと火野●イも理解していたが、あえてそこには触れない。

きちんと話せないでいる弥彦が悪いのだし、理解してもらえないと思わせておいた方が弥彦の、胸が締め付けられるような困惑の表情を見られるだろうと思っていたからだ。

ヤマヒロと呼ばれた男が火野●イを自分の隣に座らせた。そして、「お前はそこな？」そう言っただけを指差す。

―直接床に座れ―

そういう意味だ。

男なら、激怒するべき場面のはずなのに弥彦は立ったまま、なにも言えずにうつむいてしまった。

今までこんなことがあった時必ず火野●イが助けてくれたから、自分で立ち向かう『勇氣』が消えてしまっていたのだ。

今、彼女は見知らぬ、自分の一番嫌いなタイプのヤンキー調の男にキスをしてうっとりとしている。

つまり彼女は…。

自分を助けてくれるはずの彼女は…、他の男に惚れ込んでいるところを、自分に見せているのだ。

状況を整理しようと考えをめぐらせた弥彦は、火野●イが自分に比べてどれほどヤマヒロなる男に惚れているのか理解してしまい、奥歯を噛んだ。

元々、弥彦は火野●イことセーラーマー○に助けられたことを発端に彼女と交際を始めた男だった。

セーラーマー○の交際相手としては少々、貧弱だし背も低い。

火野●イ自身もそう思っていたが、他のセー○戦士に「可愛い！　女の子みたい！　こういう子と付き合いたい！」と言われ、つつい付き合い始めた。

が、やはり『男』と呼ぶには線の細い体。

やや中性的な顔に背も火野●イに比べてかなり低い。

そのことは弥彦自信もコンプレックスだった。というよりも彼には何も自信を持てるものが無かった。

背の低さや華奢な身体の外に運動も、勉強も決して良い方ではない。

金も東京に無理をして出てきた苦学生ゆえに、ほとんど持っていない。

そんな彼の唯一の自慢はセーラーマー〇と交際していることだった。

火野●イは彼にとってアイデンティであり、自分がこの世に存在して良い理由だった。

一方、火野●イはそう思っていなかった。

と言うよりも後悔に近い感覚を持っていた。

他のセー〇ー戦士に弥彦の存在を知られている以上、簡単に別れるわけにもゆかず、されど自身の男として連れ歩くには……………。

試しにパンツを下ろさせ、男の象徴を確認したが、勃起しても火野●イの小指よりもさらに小さかった。

当然のように包茎だ。

それも剥く事さえ出来ない真性。

生まれてこの方、亀頭が空気に触れたことさえない天然もの。

大きめ男根でやや左曲がりのズル剥けが好みの火野●イとしては、がっかりした。相当にがっかりだった。

セーラー〇ーンが、「まもちゃんのアレは、ポーツビク並み」と暴露して笑いを取っていたが、まさか本当にポーツビク並みの男がいるとは思わなかった。

「まあ、……………謙虚な……………オチ〇チンよね」

彼女は、そうフォローするのが精一杯だった。

そんなわけで、火野●イは弥彦を男としては見ていなかった。

そんな時に出会ったのが、ヤマヒロである。

この男は元々クスリの売人であったが、セーラーマー〇に成敗されカタギになった男だった。

金髪に近い茶髪。アロハシャツに似せて作ったシャツに、胸には金のネックレスがだらしなく垂れている。

いわゆるチンピラ、ヤンキーの類だ。

ただし、背は高く声は低い。

見目は顔が男臭く、骨格が大きいことを示すかのような骨ばった体格。

悪っぼいところも含めて、火野●イの好みどんぴしゃだった。

何よりも巨根である。

圧倒的巨根である。

それだけで火野●イにとっては満足だった。

実際の所、他のセー〇ー戦士にヤマヒロは不評であったが、火野●イ自身はその理由がなぜか分からなかった。

彼女には、生死を共にした仲間の考えさえも及ばぬほどに、ヤマヒロに惚れ込んでいた。

話を戻そう。

弥彦はベッドの上でお互いの舌を舐めあう二人を見て、憤慨することも出来ず「どうしたら、自分は火野●イさんとお付き合いを続けられるだろう。どうしたらこの男を追い出せるだろう」と考えていた。

考えていたと言うよりも、そういう考えが頭の中をグルグル回っていて、他に何も考えられなかった。

男に怒りを覚えることも火野●イに失望することも出来ないほどに、激しくグルグルと頭の中を言葉が回っていた。

「ん。ねえ。弥彦」

キスを終え、唇を離れた火野●イは弥彦に一瞥もくれることなく、話を切り出した。

「こういうわけだからさ。」

分かれてよ。

この家はあたしのなんだし。

もう来ないで。

分かったわね？」

火野●イの言葉にヤマヒロは漏れ笑いをこぼす。

弥彦は鼻からきゅっと空気を吸い込むと、震える喉から必死で声を嚙んだ。

「あっ！ ああ！

どうしたら、捨てないでくれますか？」

「はあ？」

「ど、ど、ど、どうしたら火野●イさんのそばにいれますか？」

「ダメ。」

いれない。

いさせない。

出て行って。

もうあたしに声をかけないで。

それから、他のセー〇ー戦士にあつても声をかけちゃダメ。

いいわね？」

「う……………うう……………」

震えて、沈黙を通す弥彦の態度は火野●イの言葉を拒否するものだった。そして弥彦はそれを押し通した。無論、火野●イもそのことは理解している。

火野●イが怒りを込めて声を上げようとした時、ヤマヒロが彼女の肩を抱き太ももの奥を指で撫でながら言った。

「まあまあ。いいじゃねえか。

まだまだ火野●イとお付き合いたいんだろ。

いいんじゃないの？

会ってやつても良いし、この部屋に入れてやつてもいいじゃねえか」

「だって！

弥彦のアレ……真性包茎のポーツビック未満だし」

いきなりおち○ちんが小さいことを暴露され、弥彦は慌てふためいたが、ヤマヒロは失笑するだけで、言葉が続けた。

「ポーツビック未満(笑)。

まあ、そのなんだ。

いくつか条件がある」

「何よ。

弥彦がそばにいて良い理由って」

火野●イは唇を尖らせて、ヤマヒロに胸を押し付けながら拗ねてみせた。

弥彦の見たことの無い火野●イの「女」の表情だ。

「簡単だよ。

男として扱うから、そばにいられないんだ。

男の娘になれよ。

女の服装で生活しろ。

それ以外は禁止な。

それから勃起も禁止。

「ご自慢のポーツビックに貞操帯つけてろ。

今度、俺と火野●イで試験するからな。

試験に合格したら、奴隷として置いてやるよ。

奴隷らしく、精一杯奉仕しろよ？

「マゾ奴隷としてな？」

「男の娘奴隷ってわけね！？」

それならいいわ！

それなら、…ね♥

可愛い格好をして、メイド服とか女物の服とか着て奉仕してくれるなら…。

ヤマ君が、良いっていうまで奉仕させるためにそばに置いてあげる♥」

「あ……………そんな……………」

受け入れられるはずの無い提案だった。

しかし火野●イのいない生活はもつと受け入れられない。

弥彦は、「あ……う……」と震える声を漏らして決断できず、太ももの内側にびっしりと汗をかく。

「どうするの？」

イタズラっぽく火野●イが答えをせっついた。

ヤマヒロもニヤニヤと笑いながら、弥彦を見つめていた。右手の火野●イの肩にかけた手は彼女の胸を揉みはじめ、左手はパンツの上からマン筋を見つけ割れ目に沿って撫で始めていたが…。

「もうこんな提案無いかもよ？」

火野●イの眩きに弥彦は覚悟を決めた。

決めなければならなかった。

まだ火野●イのそばに居たかった。

まだ、彼女を愛していた。

他の男に抱かれようとも…。

他の男に惚れていようとも…。

そばに居て、やれることをしたかった。

「わ……………わかりまし……………た……………」

「ぐっ。ふははははっ」

「マジ？」

いいけどねそれなら別に」

その日、弥彦は火野●イのマンションからすぐに追い出された。

玄関のドア越しに火野●イが抱かれる音が聞こえてくる。

そのまますぐに帰る気にもなれない。

弥彦はドアのそばで膝を抱えて、聞こえないふりをした。

時折聞こえてくる火野●イの、女の声に頭を抱える。

とにかくできることからしなければならなかった。

第2章

{ Sometimes it's hard
to believe
if you
remember Me }

その日、弥彦はセーラーマー〇と手をつないで歩いてた。火野●イではない。セーラー〇ーズだ。

なぜわざわざ返信してから出かけたのか。

ヤマヒロが火野●イにそう命じたからだ。

「セーラーマー〇として弥彦を連れて、これから弥彦が着る女物の服を買って来い」

それはつまり店員に、あるいは衆人に弥彦が男の娘になったことを見せて来い。

そういう意味も含まれる。

言葉にしなくても火野●イは、あるいは弥彦にもそれが理解できた。

だから火野●イはより弥彦の羞恥心を煽るようにまるで恋人のように、姉と弟のように、あるいは母と息子のように弥彦と手をつないで歩いている。

それもセーラーマー〇として。

セー〇ー戦士は世に十分に知れ渡った存在だ。否が応にも周囲の視線を集めてしまう。

今日の弥彦はそれが嫌で嫌でたまらなかった。彼女と付き合っていることこそ自分が存在として良い理由だったはずなのに。

セー〇ー戦士は普通戦闘以外で変身はしない。

それも比較的「頭の硬い」とされるセーラーマー〇なら尚更だ。

その彼女が通念を曲げてでも、言う通りにしている。

火野●イがいかにヤマヒロに惚れているのか、火野●イを愛しているからこそ弥彦は十分にその気持ちを理解せずにはいられなかった。

店はセーラーマー〇が選んだ。

いわゆる清楚系女子学生のための店だ。

おそらくこの店のメインターゲットは10代の女子だろう。

そこにいくら中性的とはいえ男の弥彦がいる。

故に、店員や他の買い物客は怪訝な顔つきで弥彦を見ていた。

見るが、注意をしたり追い出したりはしなかった。

なぜなら付き添っているのが、セーラーマー〇だからである。

まさか英雄たる彼女に出て行けとはいえない。

結果として、どこかよそ者を扱うような目で弥彦を見つめているだけだった。

「ふんふん♪」

これなんて良いんじゃない？」

ところがセーラーマー〇本人は、全く周囲の視線など気にしない。

それどころか次々と服を選んで買い物かごに放り込んでゆく。

「さ、試着室で着替えてきなさい」

「え……あ………う………」

「ほらっ！ 早く！」

半ば無理やり弥彦を試着室に放り込むと、セーラーマー〇は店員と他の買い物客に向かって声をかけた。

「さて、皆さん。」

既にお気づきかと思いますが、私が連れてきた試着室の中の弥彦くんは、皆さんの予想通り男子です。しかし本人の強い希望で男の娘として今日から、私が面倒みることになりました」

周囲がざわめく。弥彦は顔面蒼白となって逃げだしたかったが、足が言うことを聞かない。ましてや試着室の外に居るのはセーラーマー〇だ。逃げきれははずもない。

「な………何を言って………っ！！！！！」

試着室のカーテン越しに弥彦が何とか絞り出すように抗議の声を上げたが、セーラーマー〇は無視して独演を続けた。

「確かに男なのに、女性の服を着て生活することはあまりマトモとはいえません。しかし、彼はかつて私が成敗したヤクの売人であり、今は私の寢室を覗く変態でもあります。たっぷりお仕置きをした所、これからは男としてではなく女の子として生きたいというので、女子見習い、つまりは男の娘として私が再教育することにしました」

「おおっっ！」

店員や買い物客にどよめきが起る。

（そうか、あれは再教育なのか。それならば仕方がない。犯罪者に戻られて危ないクスリでも撒かれたら困る）

そう納得したような声だ。

「犯罪者の多くは欲求不満を抱えています。彼の場合は、『女の子になりたい！』という心が、彼を犯罪に走らせました。

もちろん間違った道を歩みそうになったら、私がたっぷりお仕置きします。

だからみなさん。

彼を温かい目で見てあげてください」

（違うっ！ 僕はそんな男じゃない。クスリなんて売ったこともなければ、女の子になりたいなんて言ったこともないっ！）

そう強く抗議しなかったが、今はスカートの履き方が分からない。白ブリーフに女物の長袖シャツという中途半端な格好だ。

今この格好で出て行く訳にはいかない。

そう思ったなら、弥彦の中の弱虫の部分が出てきて、何も言えなかった。

「では、ご開帳！」

「え？」

カーテンがシャツと音を立てて、開かれる。

その中から出てきたのは、「え？」という表情のまま固まった弥彦だった。

M男の象徴である白ブリーフに女物のやや濃紺の長袖シャツ。

小ぶりなお尻が丸見えになっている。

それをセーラーマー〇は、「えへん」とばかりに胸を張って、周囲を見渡した後、弥彦に向かってわざとらしく、そして優しく甘い声でこう話しかけた。

「あら？」

まだお着替え終わって無かったの？

っていうかスカートの履き方が分からなかった？

いいわ。

私が履かせてあげる。

コッチに来て、バンザイしなさい。

手がジャマだから。

バンザイ♡

顔面蒼白となっていた顔が一転して、紅潮に変わる。

セーラーマー〇は弥彦の耳元で、小さく「言うこと聞かないと……後でヤマヒロさんにお仕置きしてもらおうわよ？」とつぶやいた。

火野●イならともかく、ヤマヒロにだけは絶対にそういうことをされたくない。

哀願の表情の弥彦は涙目になり、バンザイをした。せざるを得なかった。

セーラーマー〇の白く美しい手が弥彦の足元にスカートを置き、それを履くように促す。するすると腰までスカートが上がると、セーラーマー〇はボタンを留めて弥彦に鏡の方を向くように命令した。

その姿は間違いなく清楚な女子そのものであり、誰がどう見ても『女性そのもの』だった。

唯一、後ろに立つセーラーマー〇が、他の客や店員に見えるように弥彦のスカートを捲り上げ、弥彦の純白のブリーフのお尻が見えるようにしている以外は。

クスクスと漏れ笑いが聞こえる中、弥彦は泣くつもりなどなかったのに目に涙が溜まっていることに気がついた。

そしてその涙は、とある衆人の声によって瞳から溢れることになる。

「ママー。あのお姉ちゃん。

男の人のパンツ吐いてるよー。

変なのー」

「あれはね？

治安や安全を守っているセーラーマー〇さんが犯罪者にお仕置きしているのよ。

でも、そうね。

確かにあの格好でブリーフは変ね」

そう言っていた。

弥彦の耳にも、無論聴力が常人をはるかに上回るセーラーマー〇の耳にもその声は聞こえていた。

「やだ。泣いてるの？」

そっか。

そうだよね。

ごめんごめん。

女物のパンツも履かないと、男の娘にはなれなかったね♥

「ちが……違くて……そうじゃ……そうじゃなくて……」

「うんうん♥

大丈夫よ。

お姉ちゃんと一緒に行ってあげるから。

可愛いおパンツ買いましょね♥♥♥

女性物の下着コーナーは同じビルの別フロアー。

弥彦は、当然のように手をつないだセーラーマー〇に連れて行かれることとなった。



女性下着専門店でも同じように衆人に「元犯罪者の男の娘希望の男子」として紹介され、衆人環視の中で下着を履かされた弥彦は、女装したまま家路につくこととなった。帰り道不特定多数の女子に何度もクスクスと笑われて、こっそりと写メを取られたことは本人も分かっている。

分かっているが横にセーラーマー〇がいる以上、どうしようもない。スカートの裾を出来るだけ引っ張って、女子パンツを見られないようにするのが関の山だ。

駅の階段でも過敏な女子高生のようにお尻に手を当てて、下からパンツを覗かれないようにした。

今までは、男なのだからパンツぐらい見られてもどうと言うことは無い……はずだった。しかし女子パンツを履いているからか、そうしなければいけないし見られたら本当に恥ずかしいと強く意識せざるを得なかった。

必死に指を伸ばして、スカートの生地がめくれないようにしなければ、自我を保てなかった。

火野●イの家に着くと、寝室にはすでにヤマヒロがいた。

火野●イのベッドを我が物顔で占有し、寝そべりながらビールを煽っている。

「た・だ・い・まっ♡」

「おう。早かったな」

「うん♡」

ヤマ君に早く会いたかったから♡」

「そっか」

ヤマヒロはまるで彼女にするように、セーラーマー〇の頭を撫でてやった。

弥彦にはそれが癢に障る。

しかし、どうにも出来ない。

「じゃあ、早速俺たちの男の娘奴隷を見せてもらおっかな？」

「うん♡」

弥彦っ！

そこに立って、気を付けしなさい。

「気をつけ！」

「う……うん……」

弥彦が言うとおりにすると、セーラーマー〇は彼の後ろに立って

「するするする♡」

と楽しげに、弥彦のスカートを捲り上げ始めた。

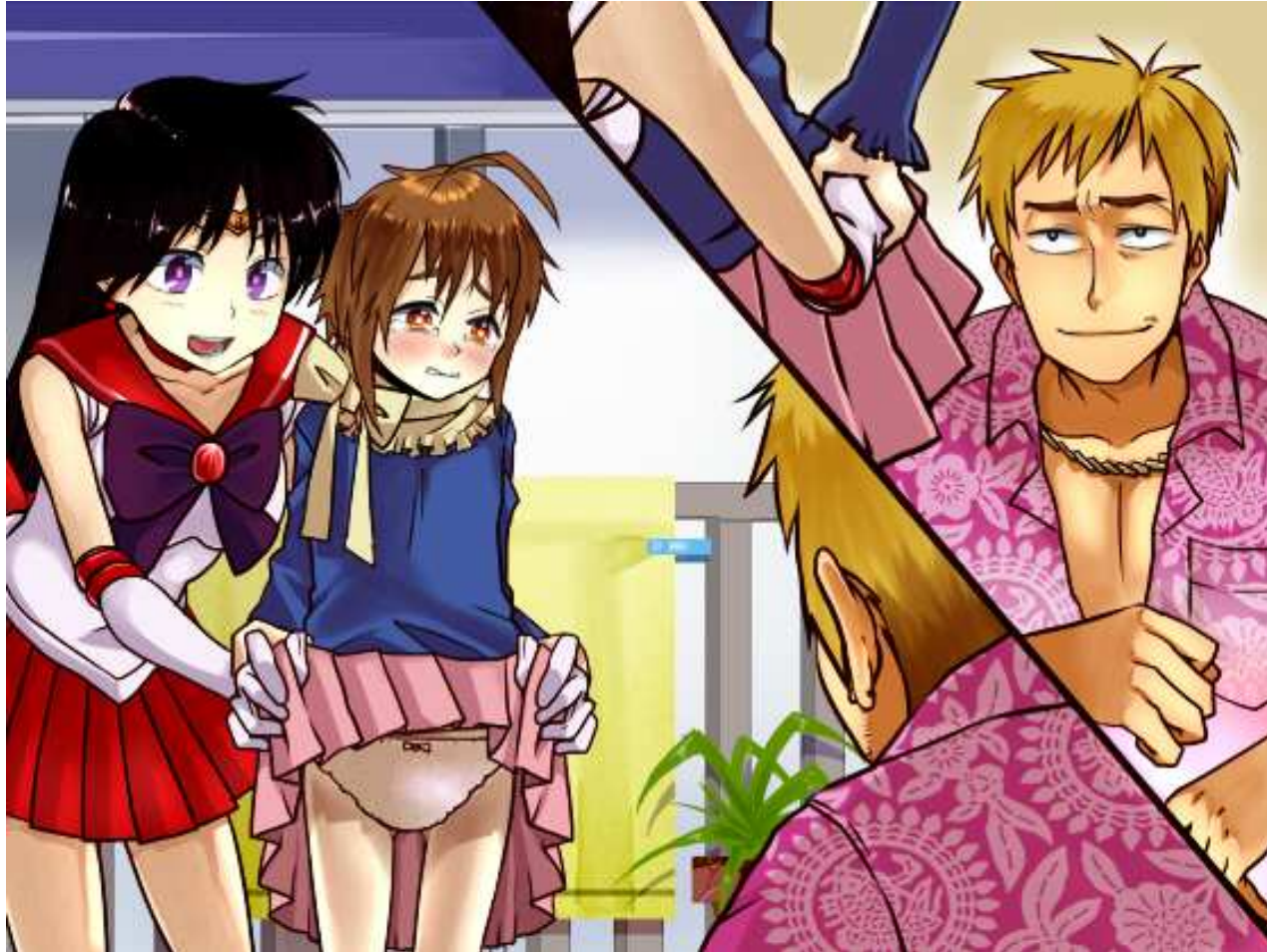
「ま、待って！」

「ダメよ。ヤマヒロさんにスカートの中も見てもらいなさい」

満足に思えるのだ。
幸せなのだ。

たとえそれが赤の他人を侮辱する笑いでも…。

(ま、赤の他人といっても、弥彦は一応「元彼」だし?)



そう思えば、まったく罪悪感など無かった。

一方弥彦は、涙腺が崩壊したように涙が溢れ、前をまっすぐ見れないでいた。

それどころか目を開けていることさえ出来ない。

鼻をぐずらせ、うつむいたまま震えている。

「じゃあ、次は貞操帯だな。

おい。

弥彦の可愛いパンティーを下ろしてやれ。

チ○コにこれ、嵌めるからよ」

そう言いながら、ヤマヒロが取り出したのは鋼鉄製の亀頭の形をした小さなチューブだった。

サイズは、セーラーマー○の小指の爪より少し大きい程度。

それが何なのか、弥彦は理解していなかったが、どうしようもなく嫌な予感しかしない。

セーラーマー○は「ヤマ君。それはいくらなんでも小さ過ぎるよ」と笑っていた。

つまりそれが何なのか理解できている様だった。

—貞操帯—

男のペニスに鍵をかけ、勃起を許さず、射精どころか立ってのオシッコさえ許さない。

それが、ヤマヒロの手の中に握られていた。

「やっ！ ……やめて……………」

「ダメだって言ったでしょ？

ほくらっ！」

セーラーマー○は光速で、弥彦の女兒パンツを足首まで下ろすと、彼を「おしっこシー」のポーズで持ち上げ、「手は頭の上で組みなさい。そうしないと、このままの格好で窓から外に落とすわよ」と、そう脅した。

ここはマンシヨンの12階だ。

もしも落とされたら、絶対に助からない。

弥彦は、手を頭の上で組むしかなかった。

せめてもの抵抗として、

「やめて……………それ……………、何？……………」

……………お願い……………、やめて……………」

そうぼそぼそつぶやいていたが、なんの効果も無いことは弥彦自信も良く分かっていった。

「さ、ヤマ君 ♡

嵌めちゃって ♡ ♡ ♡

○チンに鋼鉄の檻を嵌めてゆく。

元来、貞操帯は包茎の人間には嵌めないほうが良い。

衛生面で問題が起こるからだ。

しかし、ヤマヒロはそんなことお構い無しに、小さな貞操帯で小さな新米『男の娘奴隷』

のオチ○チンに鍵をかけた。

鍵は、もう外れない。

ヤマヒロが、外そうと思わない限りは。

もう男らしく勃起することも。

男らしく、立ってオシッコをすることも。

なにより、男として射精することも出来ない。

ヤマヒロが許さない限りは……………。

セーラーマー○もヤマヒロも、弥彦にそのことを説明する気は無いらしい。

貞操帯をかけられた弥彦を男の娘の格好のままベランダに追い出して、中から鍵をかける
とカーテンを閉めて、二人は抱き合った。

SEX。SEX。SEX。

若く、体力の有る二人にとつて、ほんの6時間程度のSEXなど何の負担にもならない。

弥彦は貞操帯がどういふものなのかうっすらと理解していたが、大好きな火野●イがガ
ラスの向こうで抱かれ、幸せそうな声を上げるたびに、興奮ではなく絶望を感じていた。

チ○コなど勃つはずもなく、ただただ絶望していた。

彼が貞操帯の意味を、その恐ろしさを知るのは二人がSEXを終え、マンションを追い
出された後家に帰ってから「……………どうやっても外れない……………」と気が付いてからだった。

☆体験版はここまでです。残りは本編をダウンロードしてお楽しみ下さい。